

5 伐採の考え方

(1) 間伐

a 劣性間伐

現在の密度状態の雑木林では、大きな高木ですら長い間の互いの競争で枯れてきています。密度の調整が必要です。こうした木を間引いて密度の調整をする作業を間伐といいます。とくに弱った木を伐る場合を劣性間伐といいます。

b 優性間伐

反対に大きくなった木は積極的に利用するものとして、大きい木からどんどん伐ってゆく考え方もあります。これを優性間伐といいます。利用がちゃんと行われるシステムができていると、優性間伐は有効な方法です。

c 夏と冬で効果が違う

こずえに葉がついている夏季の場合と葉のない冬季の場合では、樹木の疎密の感じ方が違ってきます。一般に夏に比べて冬の方が少なく伐る傾向があります。

d 成長を考えた間伐量

伐採後3年ほど経ちますと残った木の枝は1～2mも空いた空間に伸長してきます。伐採後の成長を考慮した間伐木の設定は重要です。

(2) 皆伐

a 多様性を増大させる

雑木林の皆伐は生物の多様性を増大させます。通常の管理で3倍程度、皆伐前の元の群落から比べて伐採後には種数が7倍位に増大した例があります。



被圧された樹木は優勢木に空間を開け放つ
人工的に被圧木の上を伐った事例



帯状に伐採した空間に枝が伸びて閉鎖されて
きている



皆伐は林床植物の増加に最も効果がある